

戦後間もないころの並松。当時はまだたくさんの松の木が川沿いに植わっていた(写真は並松町の一瀬嘉夫さん提供)

灰色の空から白い雪が舞い落ちる。また強い寒波が訪れた。身も心も凍らすような寒風が由良川べりを吹き抜ける。川面は薄緑色をし、小さな波紋を上げ波立つ。一本の老いた大木の松が、そんな川岸に立つ。ま

全盛の治承年間(一一七〇〜一一八二)、丹波の国主(昭七、八年以後、地元では保勝会を作り、松を植えたり肥やしをやるなど)の風景になぞらえ熊野の美しい並木の保全に努めてきたという。

松並木に沿って走る現在の道(府道綾部広野線)は、かつての京街道。旧城下から三和町との境にある質山峠を越え京の都に通じ

### 並松河畔の松

## かつては景勝地の「主役」

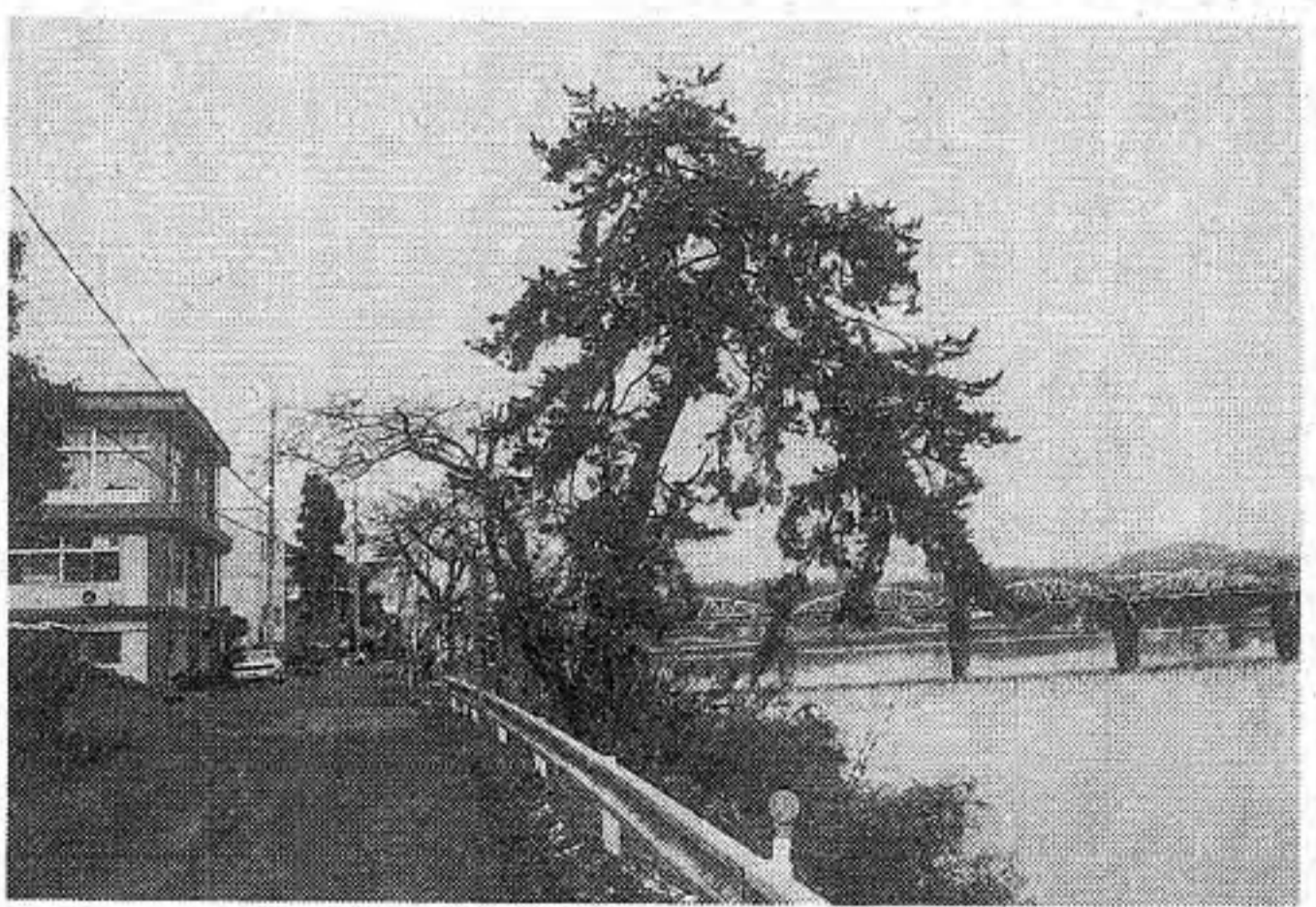
### 名残の1本も姿消す運命に

るで疲れ果てたように枝を垂らす。は、綾部藩主・九鬼隆季が入部後植えられたものらしく、昔はもっと上流まで生

並松町。ここの主役はこの松だった。かつて川沿いに美しい松並木が続き、まさに風光明媚な景勝地として知られた。綾部の観光は、ここ並松の水郷を中心とした景観から成り立ってきたとまで言われる。

綾部町史によれば、平家年の大洪水、昭和九年の台風では大被害を受けた。昭和七、八年以後、地元では保勝会を作り、松を植えたり肥やしをやるなどこの美しい並木の保全に努めてきたという。

松並木に沿って走る現在の道(府道綾部広野線)は、かつての京街道。旧城下から三和町との境にある質山峠を越え京の都に通じ



今では市の第1浄水場の近くにある松の木が昔の面影を唯一とどめている(並松町で)

昭和十二年に河畔に開店した料理旅館・現長の二代目、一瀬嘉夫さん(67)は、そうした並松の移り変わりを小学三年生の時から見守ってきた。

「戦後すぐ、先代が遊舟場を再興しました。味方町側にバンガローなどの観光

となく水害が起きて倒れてしまい、マツクイムシの害もあって徐々に少なくなってきた」と一瀬さん。

「昔は水もきれいで、いろいろな魚が陸の上から見えたもの。川も汚れてしまったし、なにより松が少なくなり、やはり寂しいものです」と話す。

平成二年八月、唯一残った三本のうち、二本がマツクイムシで枯れ、伐採された。残る一本も、幹の直径が五十センチほどある大木だが、長年の風雪に耐えきれなかったためか、どこか精気を失い、黒松の力強さが無い。

一世を風靡(び)した「綾部小唄」の中で「千古緑の並松並木」と歌われた数々の黒松。最後の一本も近く、由良川改修で姿を消す運命にある。むしろ、それまで枯れずにいるか心もとない。この「生き証人」が消える日も、そんなに遠くない。

(細見)